

第 5 章 駒林遺跡第 37 地点の調査

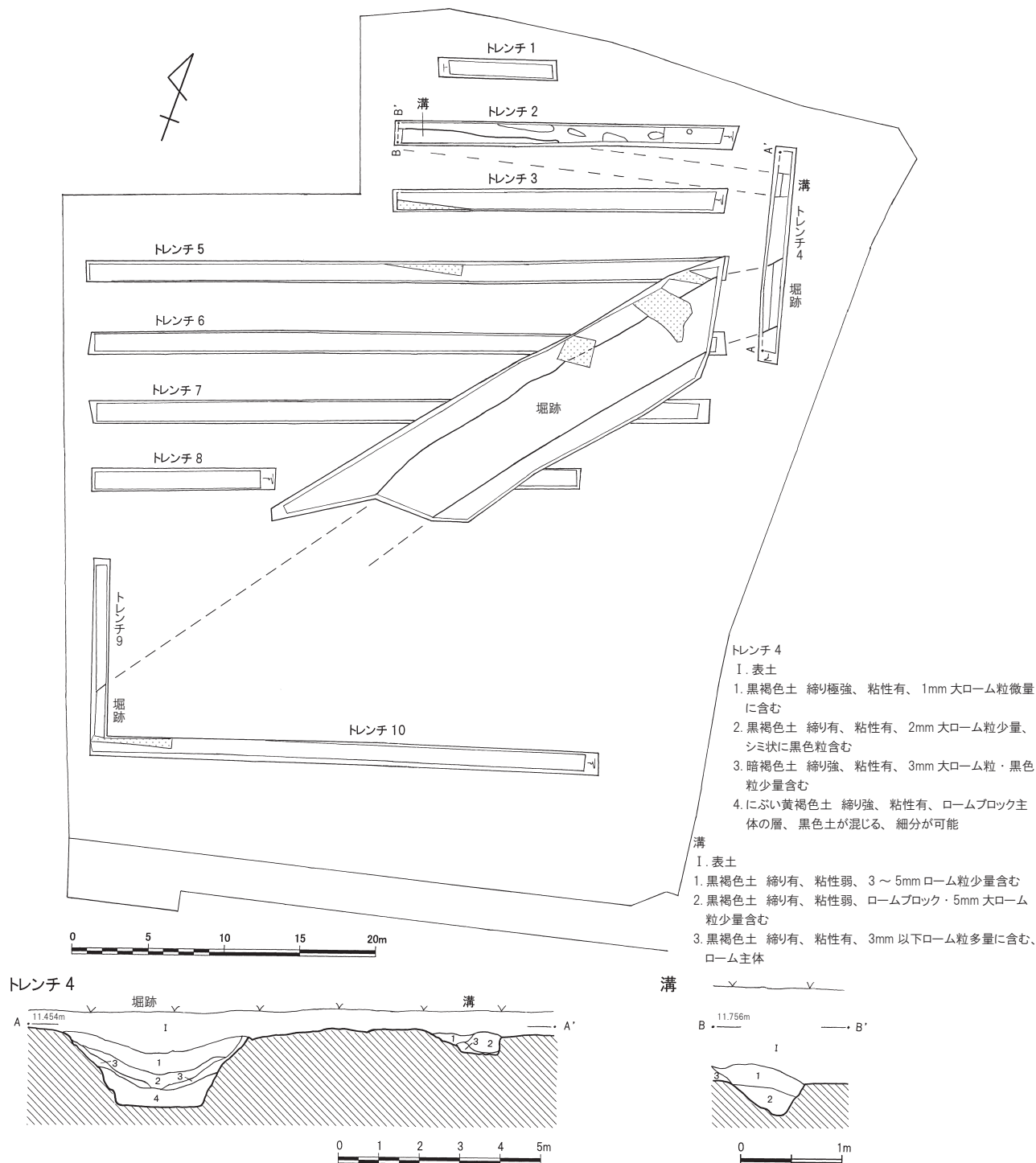
I 調査に至る経過と概要

調査は店舗建設に伴うもので、原因者より 2018 年 2 月 27 日付けで「埋蔵文化財包蔵地の開発事前協議書」がふじみ野市教育委員会に提出された。申請地は遺跡範囲内の東部に位置する。原因者と協議の結果、遺構の存在を確認するため、試掘調査を行った。

試掘調査は 2018 年 3 月 5 日～7 日まで実施した。

幅約 1.2～1.5m のトレンチ 10 本を設定し、重機による表土除去後、人力で精査を行ったところ、古代以降の堀跡、時期不明の溝を確認した。遺構確認面までの深さは約 50～100 cm である。建物建築予定部分に関しては遺跡への影響が避けられないため、原因者と再協議の結果、原因者負担による本調査を実施した。

本調査は 2018 年 3 月 12 日～16 日まで実施した。



遺構への影響が生じる範囲に調査区を設定し、重機による表土除去後、人力で調査を行った。調査の結果、堀跡1本と堀に伴うピットを多数検出した。

II 遺構と遺物

(1) 堀跡

調査区の中央に位置する。走行方向はN-37°Eで、南西から北東方向に走行する。遺構の規模は上端410cm、下端130cm、深さ175cmで、断面形は逆台形を呈する。今回の調査で確認された全長は約54mで、両端とも調査区外へ延伸する。底部は、南西端から中央部にかけては比較的平坦であるが、南西端から約16m

のところで50cm程高くなる。北東端では2m四方で深く掘り込まれている。また、堀跡の両斜面ではピットを複数検出した。西側斜面に集中する傾向にある。すべてが堀に伴うものとは考えられないが、いくつかは掘削時の作業用であった可能性がある。ピットの詳細に関しては、第19表に掲載した。出土遺物は2点で、遺構に伴うものではない。覆土より採取した土壌サンプルについてテフラ分析を実施した結果、第35地点と同様に12世紀以降に埋没したものと考えられる。なお、土壌サンプル分析の詳細については附編として掲載した。

第19表 駒林遺跡第37地点ピット一覧表(単位cm)

No.	平面形態	確認面径	底径	深さ	備考	No.	平面形態	確認面径	底径	深さ	備考
1	楕円形	43×20	12×11	44		25	楕円形	68×42	10×6	73.4	
2	円形	26×26	17×17	14		26	不明	(54)×40	26×(24)	25	
3	不明	60×28	46×23	11		27	不明	(43)×34	(29)×21	53.6	
4	方形	18×13	9×7	23		28	楕円形	20×14	7×7	40	
5	楕円形	24×17	12×12	42		29	方形	18×18	11×11	18	
6	楕円形	15×6	10×4	17		30	方形	19×18	11×11	36	
7	方形	19×16	11×8	29		31	楕円形	14×10	9×8	59.9	
8	不明	25×(25)	24×14	37.4		32	方形	19×19	13×10	32.4	
9	不明	(43)×29	40×10	38.7		33	方形	19×14	11×9	18.2	
10	楕円形	48×32	23×20	76.2		34	方形	22×10	14×6	22.3	
11	楕円形	22×17	11×11	45.5		35	三角形	31×22	8×7	63	
12	楕円形	35×27	14×9	69.7		36	円形	19×18	12×11	32.2	
13	楕円形	44×22	17×9	86.7		37	楕円形	21×13	9×6	57.7	
14	方形	21×20	13×11	28.3		38	円形	20×16	9×5	29.5	
15	楕円形	32×18	21×9	66.2		39	方形	30×28	11×11	34.2	
16	方形	33×30	22×11	57.9		40	楕円形	35×24	12×7	39.7	
17	楕円形	22×18	10×7	48.4		41	円形	20×17	11×6	24.1	
18	円形	22×21	8×7	53.7		42	円形	23×23	11×10	20.3	
19	楕円形	34×20	12×11	46		43	円形	47×43	18×13	43.5	
20	円形	25×23	16×11	80.3		44	円形	30×22	11×7	17.7	
21	不整形	78×78	20×16	116.8		45	方形	27×26	10×9	31.8	
22	円形	36×34	20×14	42.1		46	楕円形	23×18	13×6	30.2	
23	方形	33×33	19×16	75.4		47	楕円形	45×26	14×14	71.1	
24	円形	64×60	9×7	53.2							

(2) 溝

溝は調査区北側に位置する。トレンチ 2 及びトレンチ 4 で検出した。東西方向に走行し、両端とも調査区外へ延伸する。上端 157 cm、下端 93 cm、深さ 52 cmを測り、断面形は U 字形を呈する。出土遺物は 1 点のみで、遺構に伴うものではない。土層の観察から近世以降に帰属するものと考えられる。

(3) 出土遺物

出土遺物については第 30 図及び第 20 表に掲載した。全体として出土量が少なく、遺構の時期を決定するようなものは出土していない。



0. 攪乱

1. 黒褐色土 締り弱、粘性有、3 ~ 5mm ローム粒少量含む

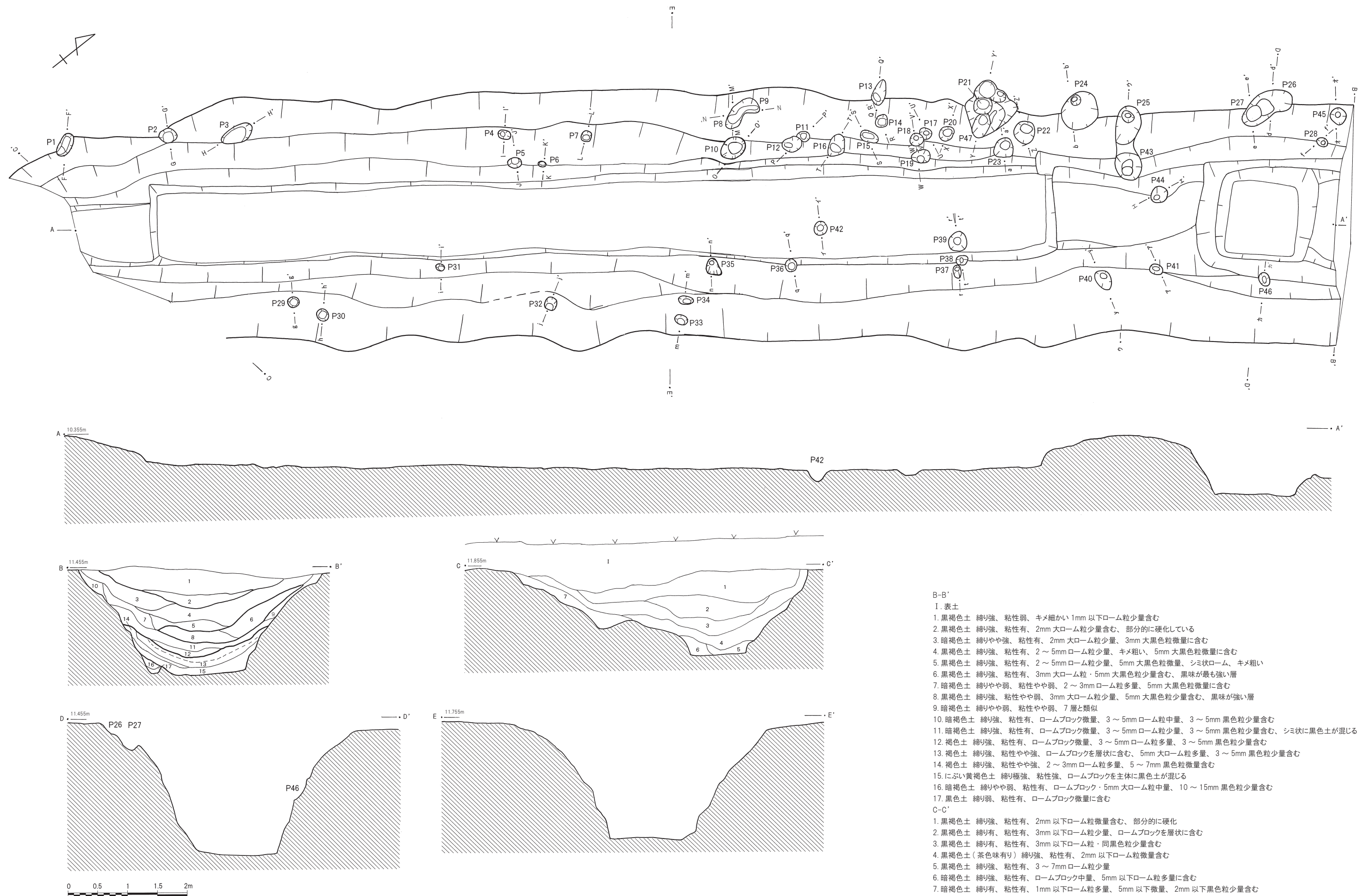
1'. 1 層にロームブロックを微量に含む

2. 黒褐色土 締り有、粘性有、ロームブロック・3 ~ 5mm ローム粒少量含む

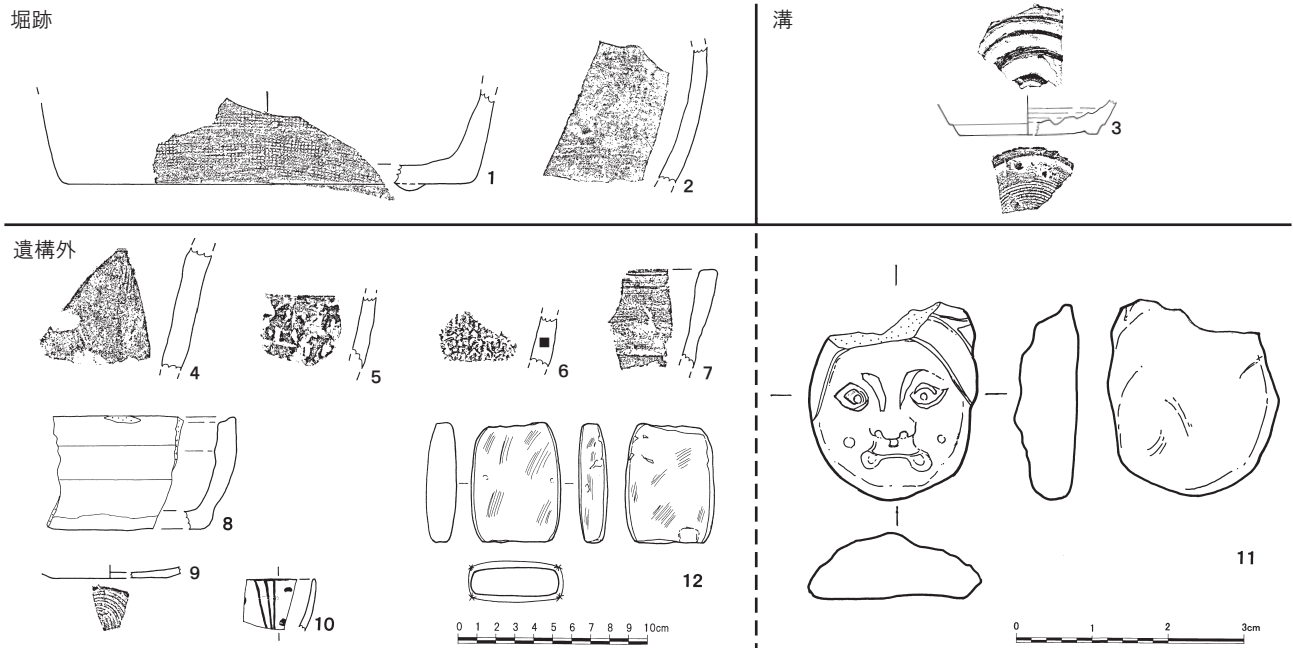
3. にぶい黄褐色土 締り弱、粘性強、ロームブロックを主体とするボロボロした土

4. 黒褐色土 締り有、粘性有、3mm 以下ローム粒微量

第 28 図 駒林遺跡第 37 地点ピット群 (1/60)



第29図 駒林第37地点堀跡・ピット群(1/60)



第30図 駒林遺跡第37地点出土遺物 (1/4・1/1)

第20表 駒林遺跡第37地点出土遺物観察表 (単位 cm・g)

図版番号	出土遺構	種別・器種	口径・長さ	底径・幅	高さ・厚さ	重量	技法・文様他	備考	
第30図-1	堀跡	瓦質土器・火鉢	—	(21.5)	4.9	—	轆轤成形、底面に半球状の突起をもつ、輪子による施文、外面黒色研磨	江戸近郊産	19世紀
第30図-2		陶器・三筋壺	—	—	0.78	—	轆轤、緑釉	常滑	中世
第30図-3	溝	陶器・德利	—	(7.3)	—	—	底部内面轆轤による沈線顕著、糸切底(回転不明)／高台外面釉	瀬戸・美濃系	近世
第30図-4	遺構外	須恵質・甕	—	—	—	—	白色粒多	—	中世
第30図-5		縄文土器・深鉢	—	—	—	—	先端鋭利な刺突具／灰白色	—	中期
第30図-6		縄文土器・深鉢	—	—	—	—	地文無節Lr／繊維	—	黒浜
第30図-7		土器・焙烙	—	—	—	—	輪積成形、型押	在地系	近世
第30図-8		土器・焙烙	—	—	5.9	—	輪積成形、型押／微白・赤色粒多	在地系	近世
第30図-9		陶器・小皿	—	(5.9)	0.3	—	轆轤成形(糸切底)	—	近世
第30図-10		磁器・碗	—	—	0.3	—	透明釉・染付	肥前系	19世紀
第30図-11		土製品・泥面子	2.2	2.1	0.7	3.5	男性人物モチーフ／型押・型抜／明橙褐色／底面に擦痕	在地系	19世紀
第30図-12		砥石・仕上砥	6.3	4.7	1.5	62.2	内外面、両側面使用／凝灰岩(灰褐色)	上下面未使用／打製石斧再利用か	()は推定

附 編

駒林遺跡第 37 地点のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

ふじみ野市に所在する駒林遺跡は、荒川中流域右岸に広がる武蔵野台地北部の台地平坦面上に位置する。この付近の武蔵野台地は、広く M2 面 (約 8 万年前に形成) に区分されているが、荒川低地に臨む台地縁辺部にはそれよりも一段低い立川面に相当する台地も分布している (久保, 1988 など)。駒林遺跡は、こうした立川面相当の台地上に位置していると考えられる。

これまでの発掘調査によって、中世の遺物包含層をその埋積層中部に有する溝跡が検出されている。本報告では、溝跡埋積層を対象として指標テフラの検出を行うことにより、溝跡の年代に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、中世の遺物包含層の検出された溝跡の埋積層より採取された。試料の採取された溝跡には 35 地点および 37 地点がされている。図 1 に試料採取層位を示す。

35 地点では A-A' と C-C' の 2 断面が作成されている。A-A' 断面では、埋積層の中部から試料番号 1 と 2 が採取され、溝底部の埋積層から試料番号 3 と 4 が採取されている。試料番号 1 の採取された埋積層は中世の包含層とされている。また、C-C' 断面では、埋積層中部から試料番号 5、埋積層下部から試料番号 6、溝底部から試料番号 7 がそれぞれ採取されている。試料番号 5 の採取された埋積層が中世の包含層とされている。

37 地点では B-B' と C-C' の 2 断面が作成されている。B-B' 断面では、埋積層の中部から試料番号 1 と 2 が採取され、埋積層の下部から試料番号 3 が、溝底部の埋積層から試料番号 4 が採取されている。C-C' 断面では、埋積層中部から試料番号 5、埋積層下部から試料番号 6、溝底部から試料番号 7 がそれぞれ採取されている。

2. 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

3. 結果

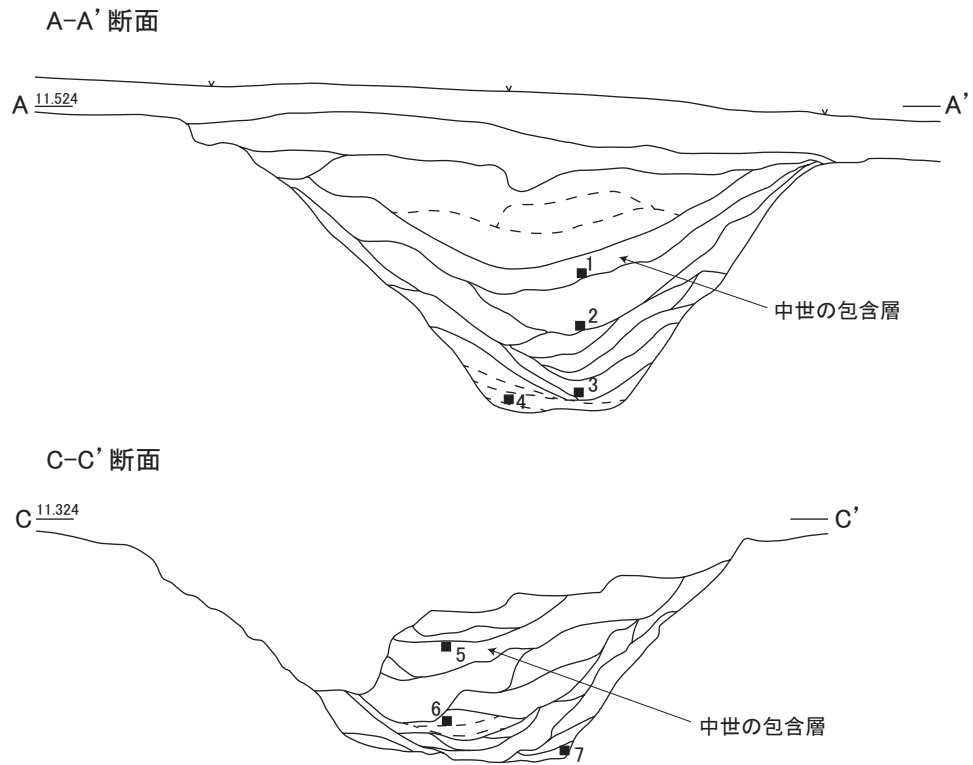
結果を表 1 に示す。以下に断面ごとに述べる。

(1) 35 地点

< A-A' 断面 >

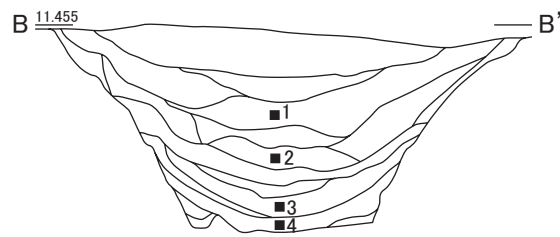
スコリアは、試料番号 1 と 2 に微量、試料番号 3 と 4 に極めて微量含まれる。特徴は、いずれの試料もほぼ同様であり、最大径は 1mm 前後、黒色で発泡不良、黒色で発泡やや不良、褐色で発泡やや不良のスコリアが混在する。火山ガラスは、試料番号 1 と 2 に極めて微量、試料番号 3 と 4 に微量含まれる。いずれの試料も、無色透明のバブル型と無色透明の軽石型が混在する。

35地点

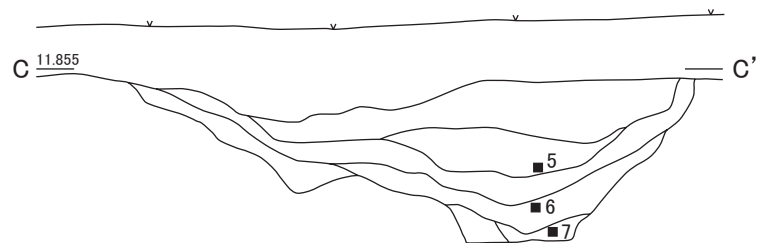


37地点

B-B' 断面



C-C' 断面



0 2m

図1. 各地点における試料採取位置

軽石は、試料番号 1 と 2 に微量、試料番号 3 と 4 に極めて微量含まれる。特徴は、いずれの試料もほぼ同様であり、最大径は 0.5mm 前後、灰褐色を呈し、発泡はやや不良、斜方輝石の斑晶を包有するものが認められる。

< C-C' 断面 >

スコリアは、試料番号 5 に微量、試料番号 6 と 7 に極めて微量含まれる。火山ガラスは、3 点の試料ともに極めて微量含まれる。軽石は、試料番号 5 に微量、試料番号 6 と 7 に極めて微量含まれる。なお、スコリア、火山ガラスおよび軽石ともに、それらの特徴は、35 地点 A-A' 断面の試料とそれぞれほぼ同様である。

(2)37 地点

< B-B' 断面 >

スコリアは、試料番号 1 と 2 に微量含まれ、試料番号 3 と 4 には含まれない。火山ガラスは、試料番号 1 と 2 に極めて微量含まれ、試料番号 3 と 4 に微量含まれる。軽石は、試料番号 1 と 2 に微量含まれ、試料番号 3 と 4 には含まれない。スコリア、火山ガラスおよび軽石ともに、それらの特徴は、35 地点 A-A' 断面の試料とそれぞれほぼ同様である。

< C-C' 断面 >

スコリアは、3 点の試料ともに微量含まれる。火山ガラスは、3 点の試料ともに極めて微量含まれる。軽石は、3 点の試料ともに微量含まれる。スコリア、火山ガラスおよび軽石ともに、それらの特徴は、35 地点 A-A' 断面の試料とそれぞれほぼ同様である。

表1. テフラ分析結果

地点	断面	試料番号	量	スコリア 色調・発泡度	最大 粒径	火山ガラス 色調・形態	量	軽石 色調・発泡度	最大 粒径
35	A-A'	1	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.2 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8
		12	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.2 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8
		13	I(+)	B・b,B・sb,Br・sb	0.6 I+	lcl・bw,cl・pm	I(+)	GBr・sb(opx)	0.4
		14	I(+)	B・b,B・sb,Br・sb	1.0 I+	lcl・bw,cl・pm	I(+)	GBr・sb(opx)	0.6
	C-C'	15	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.5 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8
		16	I(+)	B・b,B・sb,Br・sb	1.8 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I(+)	GBr・sb(opx)	0.5
		17	I(+)	B・b,B・sb,Br・sb	1.2 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I(+)	GBr・sb(opx)	0.6
37	B-B'	11	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.8 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.7
		12	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.6 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8
		13	—	—	—	lcl・bw,cl・pm	—	—	—
	C-C'	14	—	—	—	lcl・bw,cl・pm	—	—	—
		15	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.7 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8
		16	+	B・b,B・sb,Br・sb	1.8 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8
		17	+	B・b,B・sb,Br・sb	2.0 I(+)	lcl・bw,cl・pm	I+	GBr・sb(opx)	0.8

凡例 一:含まれない, (+):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量.

B:黒色, Br:褐色, GBr:灰褐色.

g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径はmm.

cl:無色透明, bw:バブル型, pm:軽石型.

(opx):斜方輝石斑晶包有.

4. 考察

各断面で検出された火山碎屑物のうち、軽石は、前述した特徴とこれまでの周辺地域におけるテフラの確認事例等から、平安時代の天仁元年（AD1108 年）に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (As-B: 新井, 1979) に由来すると判断される。

一方、軽石とほぼ同様の試料において混在するスコリアは、完新世の富士火山の活動により噴出した新期富士テフラに由来すると考えられる。新期富士テフラは、上杉 (1990) により富士黒土層中の S-0 から宝永スコリアの S-25 まで記載されており、さらにこの中のテフラによっては細分されているものもあることから 50 枚近くのテフラにより構成されている。ただし、給源から離れた神奈川県東部や東京都の低地の調査例では、検出される新期富士テフラの枚数は各段に少なくなり、縄文時代後期から晩期のテフラである S-10・11(湯船第一スコリア (Yu-1))、S-13(砂沢スコリア (Zu))、弥生時代中期頃の S-22(湯船第二スコリア (Yu-2))、古墳時代のテフラとされる S-24-1～5、平安時代延暦年間の西暦 800～802 年の噴火で多量のスコリアを噴出したとされている S-24-7、さらには江戸時代の宝永 4 年 (1707 年) に噴出した宝永スコリア (F-Ho) などにほぼ限定される。当社は、これまでに神奈川県

県東部や東京都の低地の調査例により、上述した各テフラの試料を得ており、それらの観察から各テフラにはスコリアの粒径や色調および発泡度や斑晶の包有状況などの異なるスコリアが複数種混在しており、その混在の度合いが異なることで各テフラの特徴を把握している。今回検出されたスコリアは、その特徴と As-B と混在することから、平安時代に噴出した S-24-7 に由来する可能性が高い。

火山ガラスについては、その産状と形態的特徴から、立川ローム層中に拡散して含まれている始良 Tn テフラ (AT: 町田・新井, 1976) および立川ローム層上部ガラス質テフラ (UG: 山崎, 1978) に由来すると考えられる。

ここで溝埋積層中の各テフラ碎屑物の産状をみると、いずれの地点においても溝埋積層の中で濃集するという状況は認められない。このことから溝埋積層中から検出された各テフラの碎屑物は、溝の埋積時に噴火があつて降下堆積したのでなく、溝の埋積以前に溝の周囲にあった土層中にもともと含まれていた可能性がある。すなわち、溝周囲の土層が溝内に流れ込むことによって溝埋積層中にもテフラに由来する碎屑物が含まれていると考えることができる。その場合、溝の構築はテフラの降下後であることから、溝の構築は古くとも検出されたテフラの中で最も新しいテフラである As-B の降灰より以降すなわち 12 世紀初頭以降であると考えることができる。このことは中世の遺物包含層が溝内に形成されていることと矛盾しない。

引用文献

新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.

久保純子, 1988, 相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形－風成テフラを供給された名残川の谷地形－. 地理学評論, 61, 25-48.

町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰－始良 Tn 火山灰の発見とその意義－. 科学, 46, 339-347.

上杉 陽, 1990, 富士火山東方地域のテフラ標準柱状図－その 1: S-25 ～ Y-114 －. 関東の四紀, 16, 3-28.

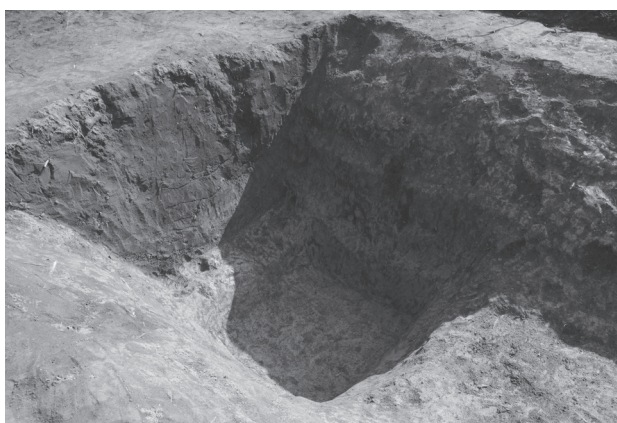
山崎晴雄, 1978, 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, 231-246.



駒林遺跡第 37 地点堀跡完掘



駒林遺跡第 37 地点試掘調査風景



駒林遺跡第 37 地点堀跡北側



駒林遺跡第 37 地点堀跡内ピット群



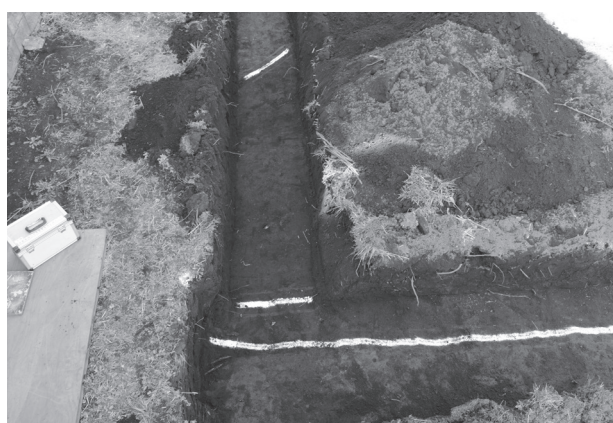
駒林遺跡第 37 地点堀跡土層



駒林遺跡第 37 地点溝

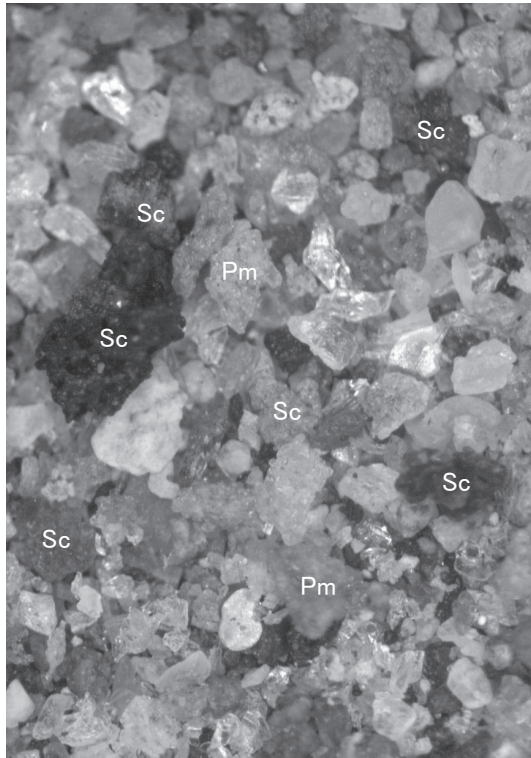


駒林遺跡第 37 地点トレンチ 2

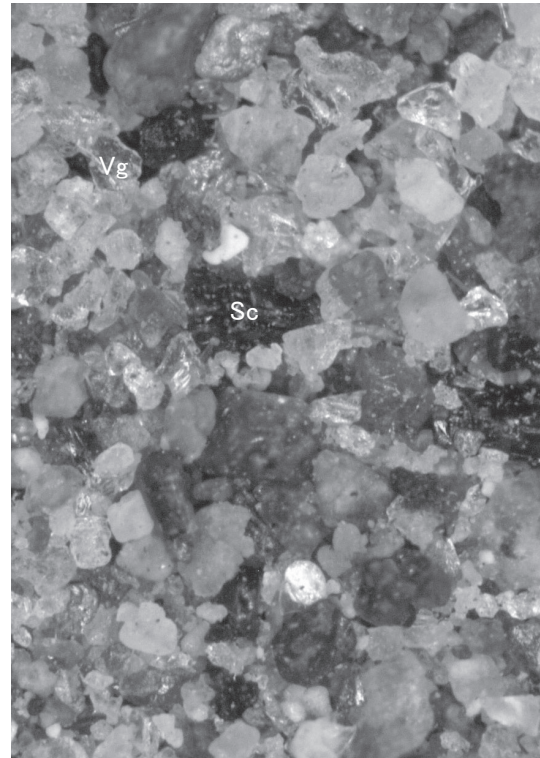


駒林遺跡第 37 地点トレンチ 9

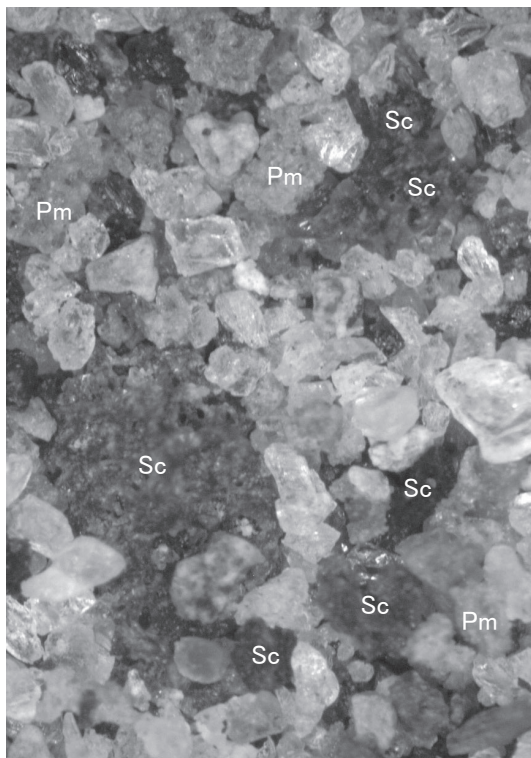
図版1 テフラ・砂分の状況



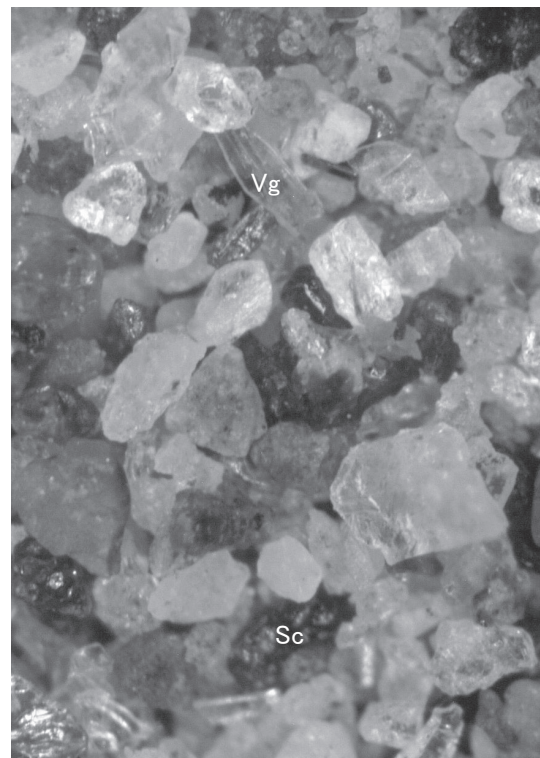
1. スコリアと軽石 (35地点;1)



2. 砂分の状況 (35地点;4)



3. スコリアと軽石 (37地点;1)



4. 砂分の状況 (37地点;4)

Pm: 軽石. Vg: 火山ガラス. Sc: スコリア.

1. 0mm	0. 5mm
1, 3	2, 4



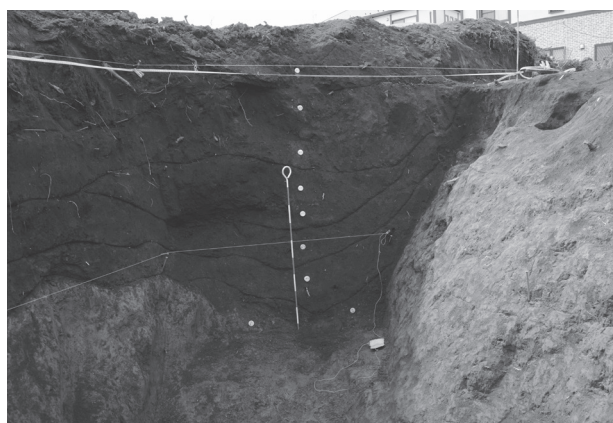
駒林遺跡第 37 地点試掘調査風景



駒林遺跡第 37 地点本調査風景 1



駒林遺跡第 37 地点本調査風景 2

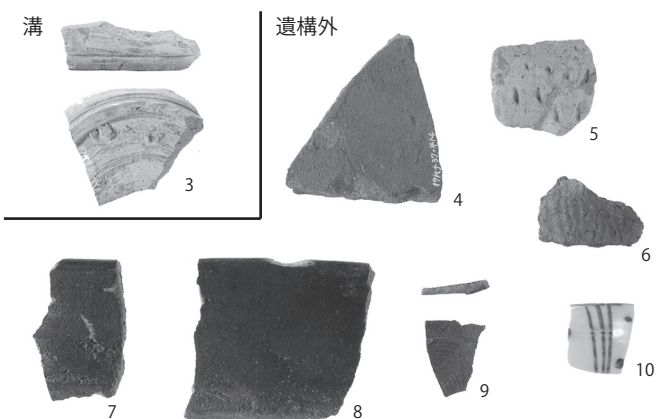
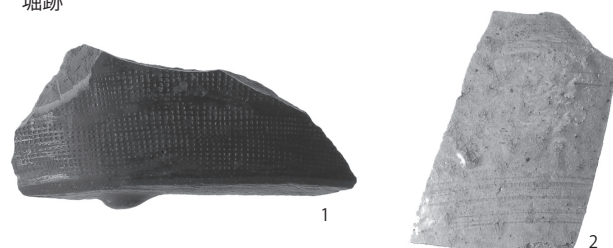


駒林遺跡第 37 地点土壌サンプル採取位置



駒林遺跡第 37 地点調査風景 3

堀跡



駒林遺跡第 37 地点出土遺物